

中林勝男 著

熊野漁民
原發
海戰記

技術と人間

熊野漁民原發海戰記

— 芦浜原發反對鬭争の回想 —

中林勝男 著

著者略歴

中林勝男（なかばやし かつお）

1918年 三重県度会郡南島町（旧島津村）生まれ

旧島津小学校卒。1946年（昭21）より三重県度会郡南島町古和浦漁業協同組合に参事として就任，後に専務理事。

1980年 同漁協退職。現在悠々自適
三重県度会郡南島町古和浦227の10

石原義剛（いしわら よしかた）

1937年 三重県津市生まれ
早稲田大学卒。1969年に前職を辞して，財団法人東海水産科学協会「海の博物館」建設にあたる。
現在 鳥羽海の博物館長
三重県伊勢市八日市場町7の21

平賀久郎（ひらが ひさお）

1917年生まれ
大阪・旧制興国商業学校卒
1951年より79年まで三重県度会郡南島町方座浦漁協長。
現在 南島町町議員
三重県度会郡南島町方座浦32

熊野漁民原発海戦記——芦浜原発反対闘争の回想

1982年4月20日 初版第1刷発行

定価 1,800 円

著者 中林勝男

発行所 （株）技術と人間／高橋 昇

東京都新宿区神楽坂3-6-12

☎06-260-9321 振替 東京7-192694

印刷 中光印刷株式会社，暁美術印刷株式会社

製本 （株）トキワ製本所

0036-101021-1504 〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取り替え致します。

はじめに

三重県南島町と紀勢町にまたがる芦浜に、中部電力の原子力発電所を建設するという計画が新聞報道されたのは、昭和三十八年も暮れようとする十二月一日のことである。それから四年、激しい攻防を繰り返した原発問題は、昭和四十二年九月二十一日、田中覚三重県知事が「原発建設の方針を一八〇度転換し、終止符を打つ」と声明し、急転直下、白紙還元で解決した。

しかしながら、この間の南島町民、特に漁民の血みどろの反対闘争は言語に絶するものがあつた。漁民からはじまった反対闘争は、部落ぐるみの、やがて町ぐるみの闘争に発展し、県内漁民あげての反対闘争への結集は、大河の流れとなり、権力と財力を唯一の武器とした県知事と中部電力の、強引きわまる原発推進の野望は脆くも潰え去つたのである。

無知無学の徒とののしられ、「地域エゴ」呼ばわりのなか、暗中模索の反対闘争は困難をきわめたが、誰もが自らの生活の場である海を守るため、他力本願をすて、自らの力を信じ、協同組合運動の原則をつらぬいて団結を守り、一糸乱れず行動したことが、勝利への道につながつたものと言えよう。

顧みて、老若男女三〇〇〇人の怒りをこめてのデモ行進、原発反対の歌は士気を高め、数百隻にのぼる海上デモは漁民の連帯を深めた。

しかし、芦浜の現地踏査実施は、実力阻止の困難さを暗示していた。が、衆議院視察団陳情は、一転、長島事件をひき起こす。そして、逮捕、投獄、有罪。しかし、天はわれわれを見棄てなかった。知事の終止符発言。その日の感動と涙。諸々の想い出はわれわれの脳裡から消えることがない。

あれから一四年の歳月が流れた。県、中電への怒りも消えた。錦漁民への憎しみも今はない。時はすべてを解決してくれるのだろうか。平和を取り戻した芦浜は何事もなかったように、今日も悠久の営みをつづける。

当時「群盲、象を撫でる」類にたとえられた漁民の反対闘争により顕在化した原子力発電所問題は、この闘争に終止符が打たれて以降、国民の関心も高まり、米国スリーマイル島での大事故発生、国内既設原発の事故続発、放射能による海洋汚染、深刻化しつつある廃棄物処理問題などにより誰もが論じ、賛否を戦わせているのを見ると、われわれの主張が杞憂ではなかったことを現実知り、隔世の感を抱く。

ともあれ夢想だになかった大問題に取り組み、中部電力の巨大なる財力と県の権力に敢然といども、見事打ち勝った南島漁民の力と行動は高く評価されるべきであろう。当時、南島町古和浦漁協の専務であった私は、古和浦地区、町内漁協、原対協、中央闘争本部の委員として、また事務局担当者

として、直接終始、この闘争の計画立案と行動に参画した。

今、静かに当時を振り返り、その事実を漁協運動史の一頁に残すことの責任を務めと感じ、三五年に及ぶ漁協運動の現場から去り、身心共に解放されたのを機会に、稚拙を顧みず起稿したものである。

漁民の海を守り、ささやかな生活を守らんとする気持を、本書からいくばくかでも汲みとっていた
だければ、これほどの喜びはない。

目次／熊野漁民原発海戦記——芦浜原発反対闘争の回想

はじめに・1

第一章 真珠か原発か・9

第二章 芦浜決定の波紋・55

第三章 長期持久戦へ・93

第四章 海で闘う——長島事件・145

第五章 囚われの日々——拘置所日記抄・197

第六章 勝利の秋・223

あとがき・238

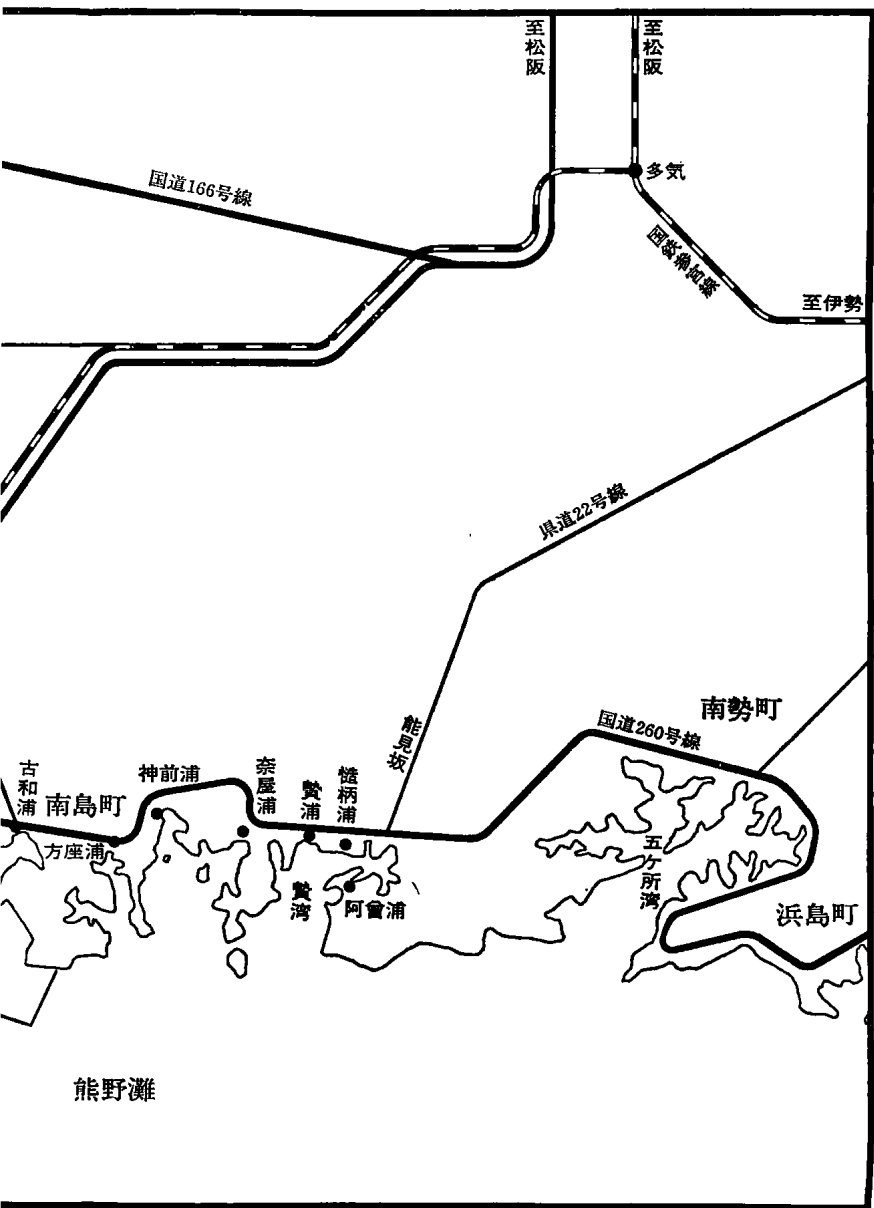
中林勝男君のこと——平賀久郎・242

〈解説〉知られざる小さな漁村の大きな事件——石原義剛・248

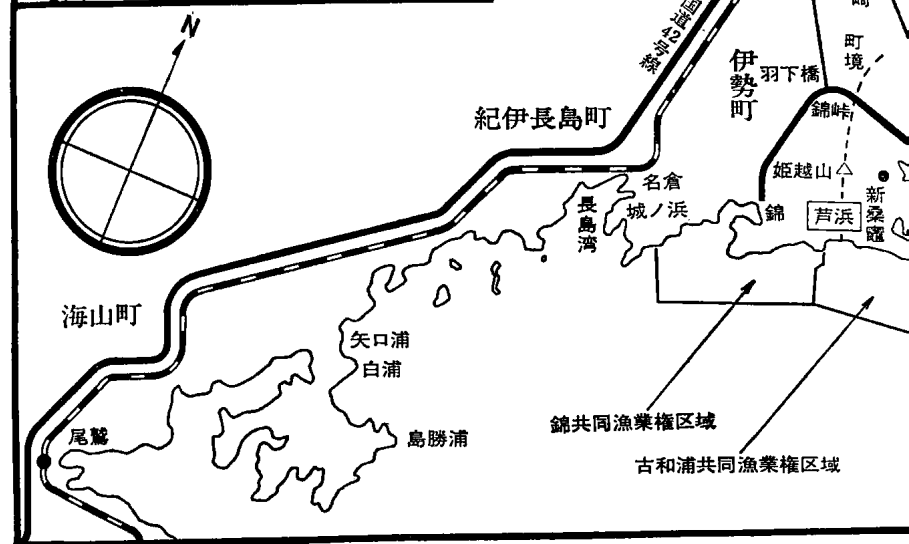
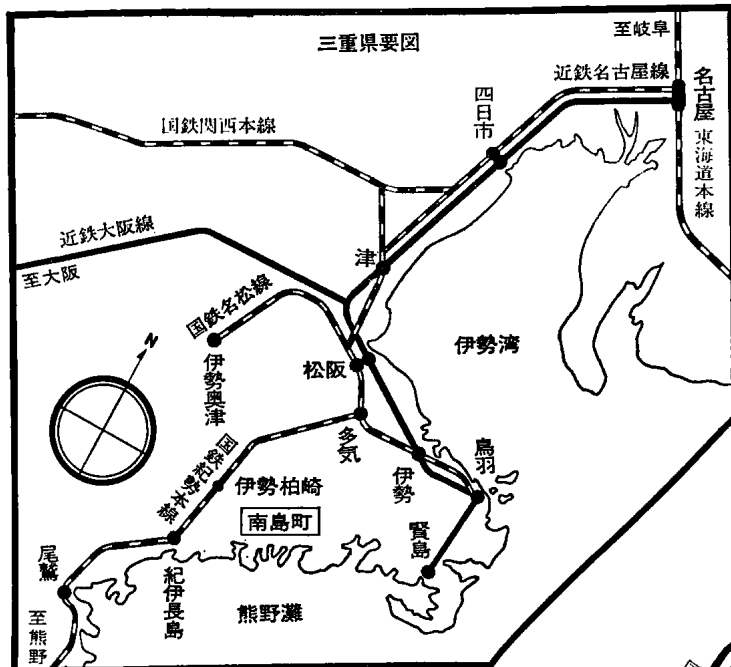
芦浜原発反対闘争年表——石原義剛・266

口絵写真／竹内敏信 装幀・イラスト／石田 隆

芦浜原発反対闘争関係図

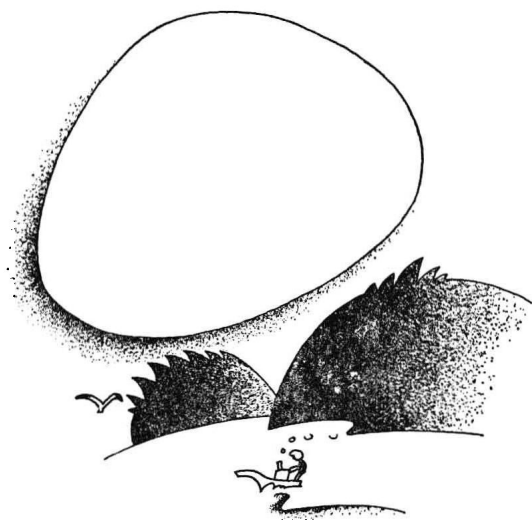


三重県要図



第一章 真珠か原発か

昭和38年12月—昭和39年6月



●寝耳に水

昭和三十八年十二月一日、三重県の熊野灘沿岸に、原子力発電所建設のための候補地を、中部電力株式会社が決定したと、「朝日新聞」朝刊は一面で大きく報じた。それはまさに、熊野灘漁民そして南島町漁民にとって、寝耳に水の話であった。

「▽県下に来る原子力発電所 南勢・紀州いずれかおあつらえ向きの適地

入り込んだ海岸線、わずかな低地、あとは海岸にまでせり出しているリアス式海岸地帯——南勢・紀州地方は地形がわざわざいしてほとんど残り残された未開発地だ。だが十一月三十日を境にして大きく転換しようとしている。中部電力が計画していた原子力発電所が、

度会郡紀勢町・南島町 芦浜

北牟婁郡長島町 城ノ浜

北牟婁郡海山町 大白池

のいずれか一カ所に来るからだ。

近代科学工業の花、原子力発電所が東海地方で初めて、それもよりによって近代化のおくれている南勢・紀州に建設されるのだ。いまや「陸の孤島」南勢・紀州地方は、中京、阪神工業地帯に電

力を送る日本一のエネルギーセンターとなりつつあるといえる。やがてとる「原子の灯」は紀州地方の、三重県下の、そして日本の未来を照し出す灯になるだろう。」

「朝日新聞」は「原子の灯」を輝かしい「日本の未来を照す灯」と伝える。田中覚^{さと}三重県知事は、自信あふれる談話を発表する。

「県内でも「陸の孤島」といわれる辺地開発に役立つと同時に、三重県は中京経済圏のエネルギーセンターとして、その発展に寄与できると確信している。しかし「原子力」というと何か恐ろしいものという考え方が多いので、もっと正しい理解をうるためPRが必要だ。地元の意向を打診してみたところでは、警戒的な態度というより、辺地開発という意味から賛成してくれている。」

この日以来、満四年をこえる、熊野灘漁民の「原発」との闘いがはじまる。

中部電力の発表によると、

「三重県南部を一応予定地とし、三重県当局に適地の推薦を依頼していたが、このほど三重県と共同調査の結果、三候補地を決定したもので、二十八日関係四カ町長を招き地元の協力を要請した。来月早々にボーリング、地質地盤などの現地調査にはいり、このなかから建設用地として最適な一カ所を決める。原子力発電所の規模は、出力二〇万キロワットから四〇万キロワット、建設資金約三〇〇億円、用地は約一三〇万平方メートルで、四十一年度着工、四十五年度完成を目標にし

ている。」

寝耳に水とはこのことであつた。とともに、それほど現実感をおこさせる話でもなかった。原子力発電という言葉は、それとなく聞いて耳にあつたが、原子爆弾の仲間なのかと、それもあまりはつきりした認識があつたわけではない。しかし、いやな予感がする。せつかく軌道に乗った真珠養殖漁業に影響はないだろうか。もしあれば漁民の生活は根底から覆されてしまう。このとき私は、三重県度会郡南島町、古和浦漁業協同組合の専務理事であつた。いや応なくこの問題への対応を迫られる立場にあつた。当時、四六歳であつた。

いやな予感があつても、正直なにがなんだかさっぱりわからんというのが本場で、ただ暗中模索、したがって、はじめからなにがなんでも反対せねばならんといった気持はない。実体をよく見きわめないと結論はだせない。私だけでなく、南島町漁協の幹部はみなそんな風に話し合つて、頭から原発を否定したのではなかった。

「原子力発電ってなんのことやなあ、原発ちゅうのは原爆かいなあ、という時代やったでの。原発がきよるんやて。いいも悪いもあらへんわ。山のものとも、海のものともわからん、おかしなこと言うてきたなあ。でっかい仕事があれば、南島は豊かになるなんて、そんな気持もなかった。そのかわり、弊害というのも、いのちをかけて反対する気なんかもなんにもなかったわなあ。」

後に、県議会の「反原発男」と自他ともに許し、われわれ原発反対運動の確固たる指導者となる里さと

中政吉県議（自民党・度会郡選出）は、こう回想する。彼は当時、県議会議長であった。

「フグは食いたし、命は惜ししつてとこですか。町の発展のために役立つとは思いますが、われわれ漁民の命の綱である漁場にいったいどんな影響があるのやら……」とは、ある漁協幹部の言葉だが、うまいことを言ったものだと感じたものである。

●高度経済成長時代のまっただ中で

その年の十月二十六日、すなわち、中部電力が熊野灘に原発候補地を発表した、わずか一カ月前、日本ではじめての動力試験炉が原研東海村研究所でやっと成功した。日本の原子力発電がなんとか産声をあげたばかりの時期でもあった。だから、昭和三十六年九月に着工した、日本原子力発電会社の東海発電所は、数々の難問にぶつかり、まだ発電開始の目処^{めど}さえ立っていなかった。

しかし、世は「高度経済成長時代」のまっただ中にあった。なにをさておいても、経済の復興を優先してきた大戦後の日本は、すでに著しい成果をみせ、戦前を乗りこえていた。さらに経済発展に拍車をかけるため、昭和三十七年、「全国総合開発計画」を策定、国をあげて、豊かな国への道突っ走っていた。人びとの心には、豊かで幸せな生活の訪れへの期待があふれている。走り出した「豊かさ行きの列車」に乗り遅れまいと、誰もが飛びつく。飢えた戦後の日々があっただけに、豊かさが見ればたとえ砂漠の蜃気楼でも捕まえる気であった。

その前年三十六年、三重県も「三重県長期経済計画」を発表、田中知事はその序文で高らかにうた

い上げていた。

「わたくしは、知事に就任以来、明るく豊かな郷土の建設を念願し、『あたたかい血の通う県政』を信条として、県財政の自主再建を強力に推し進めつつ、産業経済の振興とその基盤の整備拡張ならびに県民生活の向上を県政の基調として、諸施策を積極的に進めてまいりました。

かえりみますに、28年の13号台風、34年の伊勢湾台風および36年の第2室戸台風など頻発する大災害にもかかわらず、本県の産業経済は、わが国経済の高度成長のなかで、際立って目覚しい躍進をづけてきました。とくにここ2、3年来の産業構造の高度化は著るしいものがあり、その工業化は北伊勢臨海工業地帯を中心に、中南勢、紀州の臨海地域および内陸まで広がり、今後の太平洋岸におけるわが国経済の新しい担い手になるうとしております。……（中略）……

かつてしばしば、道路、港湾、用水等の充足の不充分は、経済成長の大きな隘路となってきたおり、これが工業をして既成工業地帯に集中させ、地方進出をためらわせた一つの要素ともなっていた。従来農業的な県として比較的これらの施設の乏しかった本県においては、新規工業の誘致のためにも、既存工業の活動促進のためにも、とくにこれら産業基盤の整備を急速に図る必要がある。」と述べて、国の敷いた経済成長列車のレールへ、「工業開発行基」を目標にむしゃぶりついていった。

この後四年間、われわれ漁民の闘う相手となった田中覚三重県知事は、東京大学農学部卒業、昭和九年農林省で官僚としての第一歩を踏み出し、昭和二十五年、農林部長として三重県に出向、二十八年にはいったん農林省に戻った。そして翌々昭和三十年四月、三重県知事改選に当たり、無所属で立